

## 中世庶民信仰の研究

柴田 実著

近時の日本史学は、文献資料とともに遺物資料及び伝承資料を総合的に活用すべき段階に達しつつあるといえよう。特に文字の文化に縁のうすい庶民の生活を歴史的に解明するためには、この三者を合せた立体的研究が不可欠の条件となりつつあるのである。本書の著者柴田実氏(京大教授)は、はやくよりこのような観点にたつて西田直二郎博士の樹立せられた文化史学の伝統を継受されつつ、これに日本民俗学を援用し、中世・近世における庶民の精神生活を、とくに神道史や思想文化史の分野において追究せられてきたのであり、数々のすぐれた先駆的業績の存在することは周知のところである。本書は本年めでたく遺曆を迎えられた教授が、中世の庶民信仰に関する業績の一部を十六編の論文集としてまとめられたものである。

次に収録せられている論文題目を紹介したい。「神と仏」「祖先崇拜の源流」「民

間信仰論」最初に取められたこの三編は本書の総論的位置を占めている。我々はここに庶民信仰史研究の方向と基本的な課題が明解に示されていることに気付かされる。「八幡神の一性格」はこの神の特異な性格とその信仰の成立基盤、庶民化した契機を追求せられたものであり、「祇園御霊会」「祇園会の沿革」「祇園会寛書」の三編は、祇園さんとして親しみ深いこの神の性格、そのまつりの成立と内容について文献学的に歴史的考察を加え、或は鉾町の伝承と習俗に即して民俗学的に検討せられ、神道史上におけるその意義をあきらかにせられたものである。「南部仏教の興隆」は中世南部仏教界の動向を民衆社会との関係に留意しつつ、興隆の背景にひそむ庶民のもつ古代的な信仰や宗教観念の存在に説き及ばれている。「郷里の念仏」は村落の念仏が集团的念仏であり、その機能が亡霊の追善と生者の逆修にあり究極的には村落全体の幸福を目的としたものである点をあきらかにせられたものである。「和光同塵」「衆生擁護の神道」の二編は、仏教の慈悲の思想の影響をうけ、中世の神が古代的な畏怖される神より衆生利益の親しまれる神

へと変化発展し、そこに中世神道の基本観念が存在することを指摘せられたものである。「荒神和讃と夫妻和合・離別祭文」は、近年発見の元興寺極楽坊遺物資料に即して、中世における荒神信仰の成立と修験道との関係、陰陽道の問題を論ぜられたものである。その他考古学のあきらかにしえない上代庶民の生活解明に民俗学の果たす役割を葬制をめぐってのべられた「葬制の問題に寄せて」ほか「中世荘民の生活」「盲目法師とその伝承」「生月の旧キリシタン」の三編が取められている。

以上が本書の概略である。いずれの一編をとりあげても、教授の研究がいかに広くかつ深いものであるかを知らしめられるものであるが、又そこには今後解明すべき幾多の問題の存在することも教えられるのである。庶民史研究にあたって、またとなきよき指針を与えられた幸いを深く感ずる次第である。

△昭和四十一年十月角川書店刊、A5  
版 写真四頁、本文二九九頁 一八〇  
〇円V(佐々木)